べたこととともかかわりあう。

おそらく、そういう研究者は本国で、暇人だとみなされているだろう。学界のメインストリームとはまったく関係がないテーマを、おいかける。自分だけの興味で勉強をしている、世捨人のようにあつかわれているかもしれない。その度合いは、日本で『太平記』を読む国文学徒がこうむるあつかいより、ひどかろう。

だが、それでもめげずに、『太平記』を読みつづける。『太平記』は、まあともかくとして、自分の日本研究をすすめていく。われわれは、国際日本文化研究センターで、そういう人たちともであっている。

私は、彼らからはげましてもらっているように、感じなくもない。べつに、ハデな社会貢献なんか、できなくってもいいじゃあないか。ゆっくり時間をかけて、私たちの仕事をみがいていきましょうよ、と。

（国際日本文化研究センター教授）

世界が日本を見つめている——傷ついたアイデンティティから

磯前順一

二〇一二年は、筆者にとって海外での研究活動をおこなう機会に恵まれた年であった。スイ

ス・チューリヒ大学でのアジアとヨーロッパの比較思想のプロジェクトに始まり、カナダで開かれたアメリカ・アジア学会のパネル「帝国日本の宗教」、アラブ首長国連邦の会議「アラブから見た日本の近代」、ドイツ・ボッフム大学での宗教研究所での集中講義「ポスト世俗主義を考える―ヨーロッパからアジアへ」、合衆国のペンシルヴァニア大学での講演「フクシマ以降の日本社会―公共性と排除」、ソウルでの比較文学会での基調報告「植民地朝鮮における神道」など、欧米や東アジアと交差する歴史のなかで、日本社会の抱える問題を国際社会が共有すべき課題として読み解こうとする比較史的な企画が多かったといえる。

それは自分の研究が日本に関心のない人々にどれだけ通用するかという意味で貴重な経験であった。相手がどこの国の人間であれ、どのよう研究分野を専攻する者であれ、日本での業績が全く通用しないところで、研究者個人としてそれぞれの場において面識のない相手と共通性を有する議論をどの程度おこなうことができるのか、それと同時に、どうせ日本人だからと言ったステレオタイプ化された相手の予想をよい意味で裏切る問題提起ができるかといったことが問われてきた。そのためには日本が優れていて、海外が駄目だ。あるいは海外が優れていて、日本が駄目だといった二項対立的な思考を退ける必要がある。居住地などの、特定の状況に属しつつも、その制度的な場から身をひきはがす空間を自分が作り出せるか否かに、発話の可能性はかかっているのだ。それはどの国を研究しているにせよ、必ず表現の翻訳可能性として問われる姿勢である。

さて、次頁に掲載した写真は二〇一一年の東日本大震災の一ヵ月後に、石巻市で撮影したものである。往来の激しい国道脇の歩道に、傷だらけの地蔵が包帯でぐるぐる巻きにされて置かれていた。現地の人たちが、自分たちがどの宗教あるいはどの宗派を信奉しているかに関わり



磯前礼子氏撮影

なく、津波で瓦礫と化した寺院の中から掘り出し、祀ったものだという。多くの人々の命が失われ、生存者もまたその生きる意味が危機にさらされる極限的状況のもとでは、どの宗教や宗派に自分が属するかという問題設定自体が意味をなさない。宗教者も、自派の教義を説くといった程度のことでは、眼前で苦しんでいる人々に対して何も為しえないという無力さを痛感したと聞く。そこでは教団という既成制度の枠とは関わりなく、一信仰者として現地でどう振る舞うことができるのか、個人としての信仰の質が問われていたのである。

そんな報告を合衆国やドイツで筆者がおこなったとき、聴衆は総じて水を打ったように静かになった。しばしの沈黙のうち、当事者としての立場に身を置き得ない外国人である自分たちは、この過酷な現実を前に口を閉ざさなければならないと、あなたは言いたいのかという質問が出された。そうではあるま

い、ここで報告している私もまた傍観者なのだ。日本人が当事者で外国人が非当事者だという分け方は成立しない。日本人の中にも当事者と非当事者の境界線は紛れもなく存在する。同時にこうした災害が日本の国内外で、どこにでも起こる可能性がある以上、私たちがいつまでも非当事者の立場に身を置くことなど出来ないのだ。そう私は答えた。

非当事者だから口をつぐまなければならないということはない。当事者たちは、その出来事のあまりの強烈さに声も出ない。だからこそ、問題は人々の被った傷をどのように言葉にしていくかにかかっている。そのために、それが小さな呟きであっても、現実の声に耳を澄ましていく必要がある。そこから、世界中の人々とともに、このつらい出来事の意味を読み解いていくことが今求められているのだ。当事者と非当事者という幾つにも折り重なった関係をふまえつつ、その区別を超えて私たちはともに働いていく必要があるのではなかろうか。非当事者であるからと言って、傍観者になってはならない。だが当事者に共感しつつも、感情的に呑み込まれてしまうならば発話する能力自体が失われてしまう恐れもある。表現者の立つ位置はとても難しい。しかし、少なくとも、外国に対して、日本を犠牲者として一方的に特権化してはならないと考える。そこでは、すでに世界と共有化すべき近代の問題、資本主義であり民主主義の問題が提起されている。それは、日本だけが特権的に語り尽くすことのできる問題ではないからである。

日本の外で活動していると、頻繁に尋ねられることが二つある。ひとつは、ここまで述べて来たような東日本大震災以降の日本社会は、原発問題を含めて、どのような方向に進もうとしているのか。もうひとつは尖閣列島や竹島をめぐる、中国や韓国との領土問題を日本の人たちがどのように考えているのかということであった。さらに、一二月におこなわれた衆議院選挙

での自民党圧勝に込められた日本の民意とは何なのかということを加えるならば、国際社会がもつ、現在の日本に対する関心がいかなるものかを知ることが出来よう。

それらの問いは、結局のところ、日本社会にとって「戦後」という時間とは何だったのか。戦後を通して私たちが何を達成し、何を見過ごし、あるいは誰に犠牲を強いてきたのかという、近代化の経験をめぐる重要な問題を提起しているのだ。原発問題について言えば、豊富な電力や資本に支えられた戦後の日本社会が、実は一方で、原発を自らの地域に受け容れなければ経済生活が成り立たなくなるような膨大な地域格差を肯定し、さらなる拡大を推進するものであったことを暴露している。メトロポリス東京の経済・社会的活動が、福島という地方からの電力によって支えられていたにもかかわらず、そこには被ばくの危険性にさらされた多くの人々がいたという事実に私たちは目を向けてこなかった。それは、大阪や京都とその周辺に原発の置かれた地域との関係にも当てはまる。さらには戦後に基地が集中的に置かれ、米国と日本本土の圧力に苦しんできた沖縄の人々、帝国日本の解体過程のなかで棄民化されていった在日コリアンの人々の存在と、同様の問題が戦後の出発時から繰り返されてきたにもかかわらず、である。

戦前の帝国体制が広島と長崎への原爆落下によって終止符が打たれたと見るならば、日本の戦後は原爆反対の動きとともに始まったともいえる。しかし、それが合衆国から産業政策として原子力技術が輸入されるなかで、原爆は反対だが、原発は明るい人類の未来につながると、いつしか原子力を推進する立場へとすり替えられていった。しかも、日本の企業はその技術をアジアに輸出しようと目論んでいる。福島原発からの放射能汚染水の垂れ流しとともに、日本が世界にもたらす原子力の被害に対して日本の社会がどう責任を取るつもりなのかが問われて

いると言ってもよい。それにもかかわらず、その状況に対する日本国民の無自覚さは、国民国家という境界線の内部に、いまだ私たちの意識が縛りつけられていることを物語っている。だが、国民国家という体制は戦前の日本帝国の否定として、連合軍による旧植民地の解放がもたらした、戦後とともに始まったものに過ぎない。はたして戦後の日本社会が本当に国民国家と呼ぶにふさわしい体制であったのか、そもそも国民国家という理念が正しいものなのか。戦後社会の矛盾が露呈した現在の日本ゆえに、このような国民国家と資本主義が絡み合った社会のメカニズムを徹底的に分析することも可能な状況になっているともいえる。

多くの日本人が戦後の日本は自由で平等な、リベラル民主主義をある程度達成した社会だと信じて来た。だが今露わになった現実は、自由主義における「自由」とは意志する自由にとどまらず、競争する自由でもあり、合衆国が端的に示すように経済的格差を能力に見合った結果として、弱者の落伍も必然的なものとして肯定する論理から成り立っている。戦後の日本社会は、福祉国家の政策を採ることで、少なくとも「日本人」と呼ばれる一般市民についてはあまり格差が開かぬように政府が配慮し、集団主義的な労働形態のもとで国家の経済的な繁栄を勝ち取ってきた。だが、小泉内閣以降、グローバル資本主義が社会に浸透していくなか、福祉政策を切り捨てた小さな政府を目指す新自由主義のもと、国内の経済格差を肯定する方向へと政治の舵は切られていった。

今回の自民党の圧勝は民主党政権に対する失望から生じたものだが、その政権の自滅していく様は、彼らがマニフェストとして掲げた福祉国家の再構築、そして沖縄からの米軍基地の撤退が、今なお容易な課題ではないことを突き付けている。ＴＰＰ参加への政治的圧力を含めて、現在でも日本は合衆国の政治・経済・軍事的な影響下のもとで存在することが可能になる

社会であり、もはや簡単には福祉国家体制に戻りえない状況にある。そのようななかで、先の野田内閣による消費税率の大幅アップの決定は、福祉政策を掲げるには日本の国家財政があまりにも破綻しており、その財政赤字を埋めるために、海外のどこにでも移転できる富裕な企業が日本に残って国内の経済を支えてくれるように、累進課税を回避して、一般市民にこれまで以上に重い消費税を課することを選んだ結果である。もちろん、政府が脱原発政策に転じようとしても財界や合衆国の同意が得られないかぎり、国民の民意など何の意味も有さない。戦後日本の民主主義は、それが虚妄にすぎないがゆえに、マジョリティである「日本人」はその理念を信じるために、国内のマイノリティ、あるいは格差を押しつけられた地方の人々に犠牲を強いてきた。しかし、今や、自分が一般の日本人だと信じて来た人々に対して、グローバル資本主義の負債が押し付けられる順番が回ってきたのである。

さらに、今回の選挙で無意識裡に市民が自民党政権を選択した背景には、そのような困難な現実を無意識ながら感じとっているがゆえに、東アジア諸国を始めとする諸外国の眼差しに目を閉ざした排外主義へと日本社会が傾きつつある状況が存在する。憲法改正による戦後民主主義の理念との決別、そして首相の靖国参拝を含む、神道を民族宗教として単一民族国家観の根幹に据える姿勢。このような民族主義は結局のところ、一九六〇年の安保闘争の時と同じように、合衆国傘下のもとで、日本人の特殊性を謳うといった捩じれた幻想をふたたび与えようとするだろう。しかし、帝国が解体することで戦後に生まれた単一民族国家という幻影への回帰は、葛藤を抱えながらも旧宗主国が旧植民地からの移民の受け入れを推進してきた国際社会の情勢からは理解し難いものに映じよう。

神道の歴史を顧みるならば、韓国併合以前の、西洋近代化の始まった時から、それが民族宗

教だという声がある一方で、それ以上に帝国宗教だ、世界宗教だという声があったことを私たちはすっかり忘却してしまっている。しかし、国民国家の境界線を踏み越えた帝国という過去を日本の社会が有する以上、竹島や独島の問題のように、歴史を遡って国民国家の領土設定を基準に議論をすること自体が不可能な行為なのだ。東アジア諸国が憤っているのは、帝国という過去を忘れて、国民国家の起源を近代以前にまで投影しようとする日本の歴史理解の在り方なのだと受け止めるべきである。

今日顕在化してきた領土問題に対して、地球上すべての地域は単一国家の領土に属するとみる国民国家主義の論理を根本から批判し得ないときには、その領土がどの国家に帰属するのがふさわしいのかという国民国家主義の発想を前提にした問いを、日本の社会のみならず、中国や韓国の社会にとっても、反復するだけの堂々巡りの議論にしかなりえない。自分たちが何者であるかというアイデンティティの問題は、たしかに他者の眼差しだけで決まるものではない。だが同時に、それは自分の自己理解だけで決まるものでもない。アイデンティティとは、それが集団であれ個人であれ、自分と他者のはざまで相互作用として決定されていく流動的なものにほかならない。この二〇年間、日本の出版界や学界ではナショナリズム批判が隆盛を極めたが、今回の領土問題を顧みるとき、その学問的批判が自分たちの日常的問題としては身についていなかったことが痛感される。

しかし、神道の祭神に数多の異国の神や異教の神が紛れ込んでいることからも明らかなように、これまで私たちが認めようとしなかっただけで、純粋な民族神道や国民国家といったものは存在した試しはない。もう一枚の写真を紹介しよう。塩釜近郊の海岸で撮影した、津波に壊された神社が再興された姿である。もとは稲荷神社であったらしく、周辺には砕かれた鳥居の

残骸や、顔の潰れた狐の石像が転がっている。その真ん中には、いまだ引かない潮のなかで、砕かれた社殿の石を再び積み上げて、中央に大黒様を祀った神社が設けられていた。そこには近代神社に特有な皇室祭祀も存在しないし、日本のナショナリズムの面影もない。あるのは打ち砕かれた伝統を、それでも傷ついたままに再構築しようとする人々の祈りである。その光景を目の当たりにして私は、「世界は廃墟、関係は拒絶、個は絶望から出発する以外になく、そこにのみ無限の希望がある」という書家、石川九楊の言葉を思い出した。さらに石川は次のように述べている。

世界はすでに廃墟なのだ。美しいものなど何もなく、守るべきものなどひとつもない。おそれ、おののき、たじろぐ必要はない。生きるとは、ただ廃墟に石を積むだけのことにすぎないと解釈した私は、私でも生きられる、生きてもいいという希望が湧いた。



磯前礼子氏撮影

そこにまぎれもなく宗教的想像力が跳躍する契機が存在する。未曾有の震災という例外状態が、宗教が政治に同化される一歩手前の姿を浮かび上がらせたのだ。

石川の言葉は、この十年間くらいで顕著になった、ジャパン・マネーを目的とする外国人研究者たちによる、神道の国際化という名のもとに民族神道の素晴らしさを寿ぐ贅言とはおおよそ異なるものである。日本人のことを善良だとか、素晴らしいとか褒めてくれるだけのナルシスティックな国際交流はもう終わりにすべきだろう。どれほど彼らが親日的に振る舞ってくれるにせよ、むしろその口当たりの良い言葉に、他者との葛藤を抱え込んでまでは、日本社会の不正や歪みに対する抜本的な批判をおこなうことのない狡猾さを見抜くべきなのだ。自分に利益をもたらす人間におもねることは、誰にでも出来る。問題はその社会が排除しようとしている弱い立場に置かれた人間に対して、公平さを欠くことのない言動をとれるかどうか、超越論的な倫理が確立できるか否か、なのだ。自分に対しては優しい人間であっても、利益をもたらさない第三者に対して冷淡であれば、その人間は倫理的な人物とはいえない。その倫理性にこそ、宗教的想像力が作動する契機があるように私には思われる。

そして、今こそ求められているのは、自分たちの耳に痛いことを忠告してくれる他者の存在ではないだろうか。このような他者は西洋という外国だけでなく、アジアという外国にも、そして国内にもマイノリティとして存在している。そのような批判的な声が届きにくくなっているのは、私たちが耳を貸したくないからなのだ。ここでいう「私たち」とは、すでに虚妄となった、自由で平等なリベラル民主主義社会としての日本を信じ込もうとするマジョリティとしての日本人である。しかし、私たちの自意識とはまったく異なる角度から、日本人をじっと眺めている眼差しに気づく感受性を育むことが求められているのだ。例外状態を経験した今だ

から、それが可能になるはずである。

なぜならば今の私たちは、瓦礫から掘り出された傷だらけの地蔵のように、あるいは砕け散った石片が積み上げられた神社のように、自分たちのアイデンティティそのものが決定的に傷ついている。かつてみられた善人たる自分への過剰な信頼感は、肉親であれ他人であれ、無辜の人びとが津波に呑まれ、放射能に汚染されていく事実を知った時、それにも拘らず自分が生き残ってしまった罪悪感として、心に深い傷を残していく。自分の負った傷を己れに対して偽り隠そうとする者は、他人の傷に対しても優しくあることは出来ないだろう。それは、自分の傷を国民国家という均質なアイデンティティに溶け込むことで隠してしまいたいからだ。そうではなく、自らの傷に対して自覚的である時に、私たちは他人の傷にも優しくあれる。それは、他人の傷に対して感受性を有するからこそ、自分の心の傷にも優しくあれるということでもある。

壊れた神社、あるいは傷だらけの地蔵の話は、他者の痛みへの感受性を問うものである。同時に、それは自分の心の傷を誰かに分かってほしいという私たちの切なる願いの表れでもある。例えば、私にとって二〇一二年の海外交流の旅は、自分に心の傷が存在するがゆえに、国籍や年齢の異なる多様な人々と心を通わせることが可能になった経験であった。しかし、どれほど心を通い合わせたとしても、それでも癒えることのない心の痛みといったものを私たちは誰しも抱えているのではないだろうか。その傷が何に由来するものなのか、自分でも理解することができないままにある。だからこそ、その理由を探し求めて、いまだ出会ったことのない人々の声を聞きに私たちは出かけて行く。その誰かを求めて止まない気持ちは、自分には親がいる、恋人がいる、家族がいるといったことでは解決のつかない、まったく異なる種類の何者

かを求めるものなのであろう。それをかつて私は、「どこにもいないあなた」と名づけた。この切なる願いこそが、傷ついた人々が祈るという信仰という行為の中核をなすもののように感じられる。

学者はすぐに物が分かったような書き方をしたがる。しかし、震災を体験した後の私たちにはもうそういった書き方はできないだろう。よく考えてみると、自分は一度もそんな書き方はしてこなかった気がする。たしかに、その分かりにくさは自分の書く文章の拙さに起因するところも少なくないだろう。しかしそれだけでなく、分かりにくさとは、実は誰しも自分自身を理解するさいに抱えこむ困難さでもあるのではないか。そして、ここの困難さにこそ、現在の日本社会を語る可能性もまた存しているように思われる。当事者の日本人であるから分かるという訳でもない。非当事者の外国人だから公平に理解できるというわけでもない。誰一人として正解を有している者はいないという認識を共通の地平として、異なる視点をもつ者が互いに謙虚かつ批判的に語りあっていくこと。そのような姿勢が、現在の日本社会が味わいつつある挫折の経験から、世界中の人々とともに近代とはいかなる経験であったのかを考え直していくような状況をもたらしてくれると考えている。

しかし、その一方で他者の痛みに対する感受性を持たない凡庸な悪、他者なき他者が、私たち自身の心のなかにも、この社会の中にも存在していることも紛れのない事実である。東日本大震災の瓦礫が延々と続くスライドを映し出したとある会場では、その光景を眼の前にして、かえって薄笑いを浮かべていた人たちが何人かいたことも、忘れることのできない現実である。相手が自分と同じ人間であると思わなければ、私たちはどんな残虐な振る舞いもおこなえる。自分の家族にとっては良き父親・母親である者が、冷酷な人種主義者であった例は枚挙に

いとまがない。そのような果てしない闇を抱えた、無限に広がる社会は、観念に偏りがちな学者の知識では決して見通すことのできないものである。

津波に流される人々の映像に大粒の涙を流した次の瞬間、テレビの番組を切り替えて、お笑い芸人の滑稽なしぐさに笑いを浮かべる人々の日常もまた、人間の愚かな性なのであろう。それでも私たちが表現者であろうとするならば、このような人間の度し難い愚かさや悪に目を凝らす強い意志と覚悟を持たなければならない。深い深い絶望の底に、希望の光は見えてくるはずである。暗闇の淵に沈んだ刹那にこそ、宗教的想像力が飛翔する瞬間もまた潜んでいると心に念じ続けたい。愚かさと悪意に満ちた人間の闇を突き抜けて行くこと以外には、もはや私たちの歩むべき道は残されていないのだ。

追記：この原稿の省略版は『中外日報』二〇一三年一月三日号に掲載されたものである。ここに発表したものは、オリジナルの長尺版である。

（国際日本文化研究センター准教授）

新任教員よりの挨拶

連想検索「想-IMAGINE」とデータベース

丸川雄三

「想-IMAGINE」とは

「想-IMAGINE」は、国立情報学研究所（ＮＩＩ）連想情報学研究開発センターが開発した連想検索システムである。「想-IMAGINE」[一]の主な特徴は、複数のデータベースを同時に検索できる番組表型インタフェースと、検索結果そのものを問い合わせに利用して、それらに関連する情報を引き出すことができる連想検索機能の二つである。

連想検索とは、多種多様なデータベースの中から、あるキーワードや新聞記事に関連する項目を集めてまとめて表示する技術である。同じくＮＩＩが開発した連想検索エンジン「GETAssoc」[二]により実現されている。システムは種となるキーワードや記事が与えられると、それをいわば「横串」として複数のデータベースに横断的な問い合わせを行い、その結果を関連度の高い順に返し表示する。これらの計算を一瞬で行っているのが、高速演算ライブラリ「GETAssoc」である。

二〇〇六年六月、「想-IMAGINE」は、書籍を中心とした情報探索サイト「想-IMAGINE